

A-17 香辛料の食欲増進効果に関する検討 (第1報)
静岡女子短大 柴田長夫 ○内藤初枝

目的 香辛料は食欲増進作用があるといわれ、日常生活にも頻繁に使われる。また食欲不振者への適量投与では効果も報告されている。一方香辛料の如き割れ物を全く好まぬ人もいる。そこでこのように種々な見解に偏して果して香辛料がどの程度の効果を示すのか。またいかなる作用で食欲を増進させるのか。この点につき人のように複雑なFactorを有しないラットを用い、カレー粉・山さび・こしょうの3種を幼若時ラットに投与したの影響を実験的に調べた。

方法 Wister系ラット、雄、初体重50g前後。実験群3種と香辛料無投与群1種の計4群を作り、こら3群の投与濃度(0.05%, 0.1%, 0.3%), 山さび群(1%, 2.5%, 5%), カレー群(0.5%, 1%, 3%)につき10日間毎に同一香辛料で濃度を変えてCake中に混せて投与した。毎日の摂取量、体重増加量及び1週毎の効率、飼育終了時には剖検、血液検査、主要臓器の重量比及び関連ある臓器の組織標本の検索などを行なった。

実験結果 ①総合的に比較して香辛料を投与しても明らかな食欲増進効果は認められまい。
②香辛料群はCake投与直後すぐ食行動を開始、しかし1日の総摂取量は無投与群と変りない。
③いずれの香辛料群でも高濃度群は2日目より摂食量、体重増加量は低下する。好ましいと思われる濃度はカレー粉0.5%, 山さび2.5%, こしょう0.05%であるが、いずれも無投与群と比べ有意差はない。
④4群の臓器重量比、血液所見は、いずれも正常である。しかし高濃度香辛料群では軟便ラットが50%近く観察された。⑤舌・胃袋・脳(鼻部)の組織検索は高濃度香辛料群の胃壁にわずかにがら変化を見たが他の組織はいずれも正常である。